

MSUB 交換留学報告書

文学部英語英米文学科 4年 佐藤優妃

1. 初めに

私は令和4年8月末から令和5年5月初めにかけて、熊本県立大学の交換留学プログラムを利用し、モンタナ州立大学に在籍していました。大学2年時に、このプログラムを使って交換留学する予定でしたが、コロナ禍の影響で渡航が困難となり、留学を断念しました。しかし、4年次に再び挑戦し、無事に留学することができました。報告書を通して、私が何を学び、何を得たのか、生活、学業、国際交流の点から説明していきたいと思います。



↑ Petro Hall にある自分の部屋から見えた1月頃のキャンパス

2. 生活面

私は、Fall Semester と Spring Semester の2学期間を Petro Hall という、いわば寮のような場所で生活していました。Fall Semester はルームメイトと二人部屋で、Spring Semester は一人部屋で過ごしました。

寮生活、そしてルームメイトとの生活は初めてだったので、とても不安でした。実際にルームメイトと生活してみると、お互いの生活リズムの違いが原因で、一緒に行動することは少なかったですが、共に夕食を取り、日用品で必要なものがあれば、買い物ついでにドライブしながら、一緒に過ごすことが度々ありました。ルームメイトとの生活リズムの違いのせいで、最初の2ヶ月間はストレスを感じることもありましたが、リズムの違いを感じずに済むような工夫をすることで、そのズレに合わせた生活をする事ができ、ストレスを感じる時間を減らすことができました。

例えば、私は基本的に授業以外の時間を部屋で過ごすことを好んでいました。しかし、ルームメイトも同じように部屋で過ごすことが好きだったため、私は部屋で一人時間を過ごせないことに、とてもストレスを感じていました。しかし、夜の9時半までは図書館で勉強をし、時には部屋以外の場所で仲の良い友人とお茶しながら話をしながら過ごすことで、仲の良い友人と長い時間を共に過ごすことに慣れ、部屋以外でもゆっくりすることができるようになりました。一人を好む傾向にあることを自覚していたからこそ、この変化には自分でも驚きました。

また私は、元々内向的でコミュニティに進んで参加しようとしないうでした。しかし、思いもよらなかった形で、多くの人と関わる機会を持つことができました。例えば、キャンパス内で一人で勉強をしていると、突然、全く関わりのない人から「元気？何してるの？」、「いつも勉強、頑張ってるね。どこからきたの？一年生？」、「あっちでゲームしているけど、一緒にしない??」など、普段の生活の中で見かけたことはあるけれど関わりのなかった学生たちから声をかけられることが多くありました。急に自己紹介され、スモールトークが起り、親しくなることが容易にできるこの土地の慣習が私をよりオープンにさせ、たとえ一人で過ごしていても、キャンパス内にあるコミュニティに属することができました。このように、とても精神的に安心のできる場所を自分の部屋以外に持つことができました。

この経験から、ルームメイトと共に暮らすのなら、事前に連絡を取り、生活リズムが合うかどうかを知ることが大切だと強く感じました。また、できるだけオープンになり、自国とは違う環境だからこそ触れることができる文化や慣習を楽しむことが重要だと思います。そうすることで、より自分にとって過ごしやすい環境や、留学の目的を果たしやすい状況を作ることができるのだと思います。



←学食での食事

3. 学業面

私は、元々熊本県立大学で受けることができない女性学の授業を受講することが、今回の交換留学の主な目的でした。しかし、私が女性学を履修登録しようとした頃には、すでに定員数を満たしており、その授業を取ることはできませんでした。しかし、授業ではありませんが、私が部長をしていた East Asia Club が女性学の Department とコラボイベントを行うことができました。“Women in Japan”というテーマで、ランチタイムに日本の女性を取り巻く問題についてのプレゼンテーションを行い、意見を聞くというイベント

です。そのイベントは、Spring Semester 中に行われたため、Fall Semester に私が履修した授業の教授や友人らがチラシを見て、参加してくれました。韓国、インド、アメリカ、メキシコやヨーロッパ諸国にも似ていないようで同じような問題があり、対策案について話を聞くことができました。女性を取り巻く問題だけではなく、このイベントを通して、私はどの国も各々似たり寄ったりの問題を抱えていて、それぞれの形で努力し、問題解決に取り組んでいることを知ることができました。

また Fall と Spring Semester を通して、ヨガ、ライティング、言語学、哲学そしてフランス語や文学の授業を受講しました。特に Fall Semester は基礎的な授業をメインに取りましたが、自分の英語力が障害となり、毎日予習や復習が大変でした。日本にいた時は、アルバイトに多くの時間を費やしていましたが、日本学生支援機構から奨学金をいただいていたことで、勉強に時間を充てることができ、思う存分に伸び伸びと学びに徹することができました。Spring Semester は比較的難しい授業を取ってしまったため、かなり大変でしたが、授業の担当の先生と話をすることで、自分のペースで学業に取り組むことができました。

勉強の環境に関しては、MSUB は、学生にとって勉強に集中しやすい環境を提供しているように感じました。よくフリーフードやフリードリンクのイベントが図書館やそれぞれの学部のオフィスで行われており、小腹すいた時に利用していました。また授業中での軽飲食は許されており、とても緩やかな雰囲気です。リラックスしながら授業を受けることができました。



↑ 女性学の Department とコラボして、“Women in Japan”をテーマにプレゼンテーションをした時

4. 国際交流

MSUB での授業が始まる1週間前に、International Students のためのオリエンテーションがあり、そこで他の国から来た留学生と仲を深めることができました。Fall Semester が始まったあとも、International Students は必修の授業を一緒に受講することが多く、

彼ら/彼女らとの関係は留學生活の居心地を良くしてくれました。また、私は Multicultural club に属し、また East Asia Club の部長をしていました。そのため、授業以外でアメリカに住んでいる現地の学生だけではなく、他の国から来ていた正規留学生や交換留学生と、有名な観光名所に行き、学内であったイベントに参加し、交流を深めることができました。留学生と話すときは大抵、各々の国の文化の違いや、政治・経済について話しました。私は元々政治や経済などに関心を持っている方だと思っていましたが、思いがけない質問を受けることもあり、より自分の国について知る機会を持つことができました。

また East Asia Club では、主に韓国と日本の伝統行事や文化について知ってもらうイベントを行いました。私がメインに関わったイベントでは、参加してくれた学生や地域の方々と共に書道、茶道や寿司作りなどを行いました。

それに加え、JOY というアメリカで2年間日本文化を伝えるプログラムを通して、MSUB の International Office で働いていた日本人の方のお手伝いをしました。その方と一緒に Billings にある現代美術館で、茶道や書道教室を開いたり、現地の小学校や中学校に行き、箸の使い方や折り紙の折り方など、日本の文化や伝統に関するレクチャーを行いました。思った以上に、多くの方が日本の文化に興味を持って参加しており、とても驚きました。留学前から「日本文化を伝える」とはどういうことなのかを考えていた私にとって、East Asia Club の活動などは、その問いについて実際に経験しながら考えていく良い機会となりました。

さらに、私は週に1時間、日本語の授業を受講している現地の学生に対して、チュータリングを行っていました。MSUB からも毎年2、3人の学生が熊本県立大学に交換留學に来ており、特に今年の9月に交換留學生日本にやってくる学生に対して、日本語を話す練習や、日本語に関する質問に答えていました。このチュータリングを通して、英語から日本語を見るという視点で、より日本語の構造や発音の面白さ、そして英語との表現方法の違いを知ることができ、自分の母語である日本語を見つめ直すことができました。

また、MSUB は留學生に対して BFF, “Best Friend Family” というホストファミリーのようなプログラムがあります。私はそのプログラムで出会った BFF の方に、空港に迎えに来てもらったり、生活で必要なものを買うのに連れて行ってもらったりと、日々の生活を支えていただきました。また、Thanksgiving Day や Christmas を一緒に祝い、アメリカの文化をよりリアルに体験することができました。



↑ BFF と一緒に夕食



↑ Multicultural Club でイエローストーン国立公園を訪れた時

5. 最後に

私は、中学生の頃から漠然と英語を話すことに憧れ、いつか留学してみたいと考えていました。しかし、大学生になり、なぜ私は留学がしたいのかという、自分なりの絶対的な理由を持っていないことに気づきました。大学2年生の時にMSUBへ交換留学に行くことが決まったものの、コロナが原因で留学を断念しました。その当時は、留学に行けないことに対して残念な気持ちよりも、むしろホッと安心することが多々ありました。なぜなら、自分は留学に行けるような力はないし、留学の志望理由も本心から書いたものではないと思っていたからです。しかしその半年後、コロナによる制限が緩和され、周りの友人が留学に行き始めた時、初めて留学に行けなかったことをとても悔しく思いました。それがきっかけで、やっぱり私は留学に行きたい、と思い、再び留学することに決めました。

次の交換留学に応募するには1年あり、自分はMSUBで何がしたいのか、その後どんなことをしたいのか、MSUBへの交換留学に関係なしにどんなことに挑戦したいのか、を熟考できる時間が多くありました。結果として、応募のために書いた志望動機は当時の自分にとっては満足いくものになりました。しかし、留学中にその目標や目的はどんどん変化していったように思えます。

そして留学前に感じていた、「自分は留学するほどの能力があるだろうか」という不安や自信のなさは、留学後でも、変わらずに「自分は留学に行ったほどの能力を築き上げることができたのだろうか」という他の形で私の前に立ち現れてきます。

留学中、「自分の考え」は、多くのことを経験し学んでいく中で変わっていきました。その一方で、自分の未熟さをもっと知ることもありました。もしこの報告書を読んでいる方が、自分は留学に行けるような十分な動機も力もないと思っても大丈夫だと思います。その不安や自信のなさは、あなたが留学に行こうが、行きまいが、ずっと存在するのかもしれませんが、何よりその不安と向き合っていくことが留学で求められます。留学を通して、あなたなりの形で、その不安と根気よく楽しく、時には辛いながらも対話することができれば結果として、何かを学び、あなたの中で何か変化していることに気がつくことができると思います。

留学すること、つまり今までとは異なる環境下で、母国語以外の言語を使い、人間関係がゼロの状態から生活するという経験は、私の柔軟さ、根気強さ、そして大胆さが大きく試された機会でありました。この報告書の中では、私が実際に経験した特に目立った出来事を報告していますが、この留学を通して、私がまだ自分でも把握できていないような部分もあると思います。それは、私の中にある何かは確かに変化し、何かは新しく生まれたものであり、その変化は今後私の生活に影響を与えるのだと思います。それと同時に、私が今思い浮かべることのできる留学体験も、その変化に呼応しながら変わり続けていくでしょう。その過程をこれから経ていくと考えると、留学は物理的には終わりましたが、とても楽しみです。

長くなってしまいましたが、これから、多くの方がこの交換留学のプログラムを通して、各人の目的が達成され、その人にとって満足のいく留學生活を送れることを願っています。

ありがとうございました。